[写真家2.0/筑豊地域おこし写真研究会]

フォトまちプロジェクト写真展

写真を通じた教育プロジェクト

2024年度報告 及び2025年度計画

本研究会の３つの軸

１. 写真部の活動

地域の魅力を再発見し、自ら故郷の魅力を発信する広報部隊

写真を通してまちを見ることで、魅力だけでなく、まちの問題にも気づき、自ら良くしようと行動する心が磨かれる。本研究会の活動の軸を支えるコミュニティ。

２. 小学校での写真を通じた総合学習

瑞々しい感性で、多様性、発見力、注意力、コミュニケーション力を磨き、飯塚の未来を担う子供達を育む

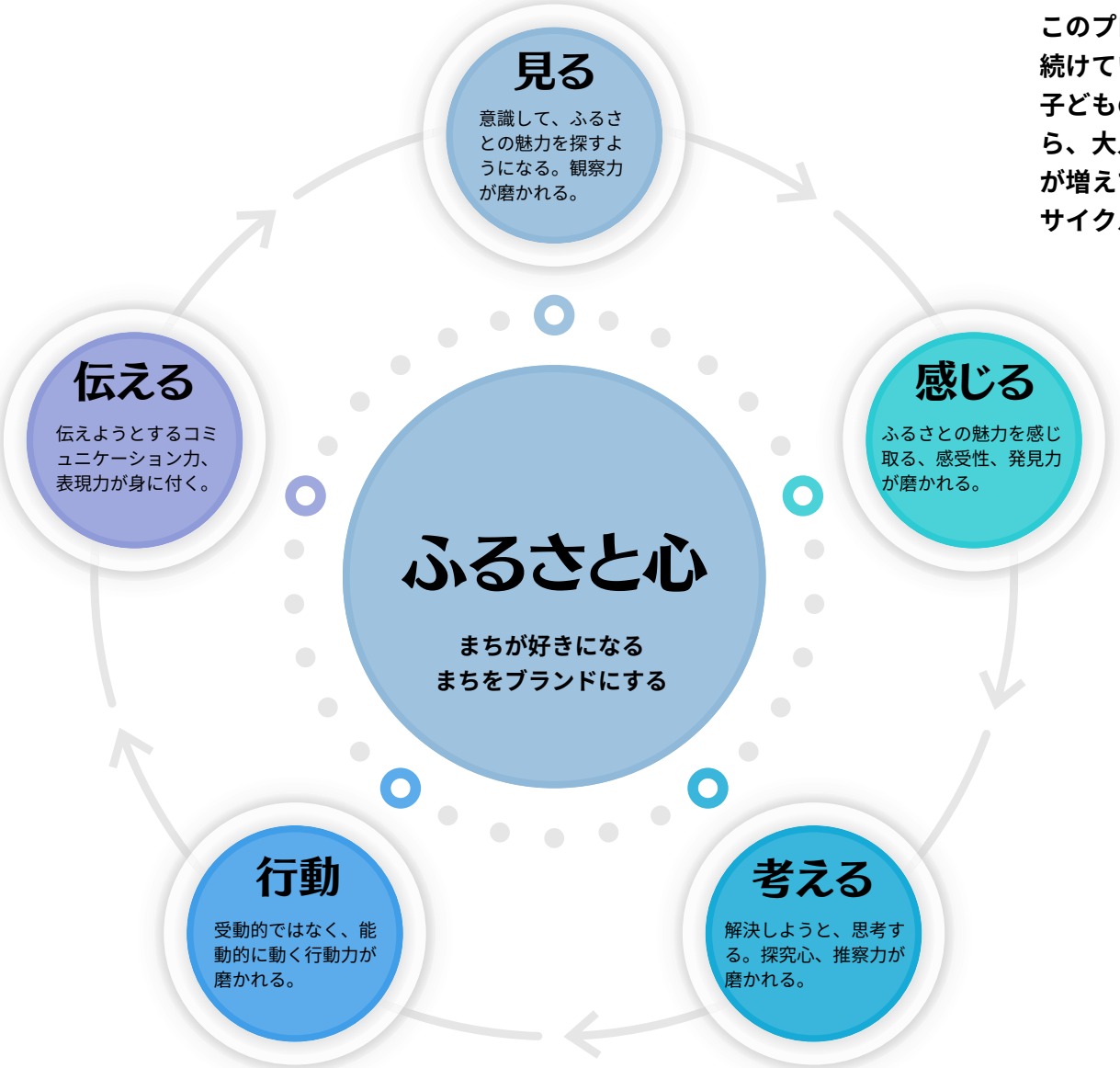
受動的な授業とは異なり、カメラを通して見たものを自ら感じて、考えて、行動する、思考力や観察力、判断力、コミュニケーション力を磨く総合学習授業。

３. 市民参加型フォトイベント

市内の魅力を伝える、体験型の写真展

写真部が主体となり、活動を通して撮影した飯塚市の魅力を写真展示イベントとして開催。小学校での教育プロジェクトと連動し、子供たちが撮影した写真も同時に展示。

「世代を超えた“まちの繋がり”を創る」（まちLoveコミュニティ）



このプロジェクトは、子どもから大人になってもサイクルとなって、続けていくことができます。
子どもの頃の「伝える」はお友達や先生、親兄弟などだったところから、大人になると、そこに自身の子どもにも伝えていく、という項目が増えていき、親から子へ、伝わっていく故郷の魅力は、さらにこのサイクルを強固なものにしていきます。

2024年度の主な活動

福岡県庁、飯塚ゆめタウンでの大型写真展の実施と、西日本初となる、小学校での写真を通じた教育プロジェクトの実施

01 | フォトまちプロジェクト写真展

市民参加型フォトイベント

撮影会、講評会、写真展示までの総合フォトイベント。
「ふるさとへの誇りや愛着はどこから生まれるのか？」をテーマに再発見を促す。
2023年度に撮影会、講評会、プレ展示を実施、2024年度は、福岡県庁での最終プレ展示を行い、年末にゆめタウン飯塚ミライ広場にて本展示を実施しました。
（福岡県庁での展示は飯塚市商工観光課が主催する、「イイもの発見！魅力たくさん飯塚展」と連動）
いずれの展示における意匠デザインを近大の学生チームが担当するなど、産学協同のイベントとなりました。

飯塚市商工観光課と連動した写真展

ゆめタウン飯塚ミライ広場での本展示

02 | 写真を通じた教育プロジェクト

小学生高学年※ふるさと心の醸成

※立岩小学校5年生、小中一貫校頴田校4年生を対象に実施

写真を撮ったり、観たりするプロセスを通じて、多様性、発見力、注意力、観察力、コミュニケーション力、探究心を育み、生きていくために必要な知恵を楽しみながら身につけていく。

同時にカメラを通して、意識して自分が住むまちを見る機会が生まれ、まちへの愛着が深層心理に刻まれる。

大きくなって、地元を離れても、「子供のころに住んでいたところはこういうところだ」と、また地元に戻ってきたいと思い起こすキッカケになる。

01 ｜ フォトまちプロジェクト写真展／福岡県庁での最終プレ展示

開催日 2024年5月20日(月)～7月12日(金)

場　所 福岡県庁11階　福岡よかもんひろば！

展示概要 タイトル：『TOIKAKE』

普段暮らす飯塚のまちなみから感じ取ったふとした瞬間の写真をキャッチコピーと共にパネル化し、近大学生チームのインスタレーション表現と合わせて展示。

撮影者

写真家2.0/筑豊地域おこし写真部

後援 飯塚市

01 ｜ フォトまちプロジェクト写真展／ゆめタウン飯塚での本展示

開催日 2024年12月26日(木)～30日(月)

場　所 ゆめタウン飯塚 2F ミライ広場

展示概要 タイトル：『TOIKAKE』

写真部が撮影した、普段暮らす飯塚のまちなみから感じ取ったふとした瞬間の写真や、小学生が「紹介したい、わたしのまち」をテーマに撮影した写真を展示。

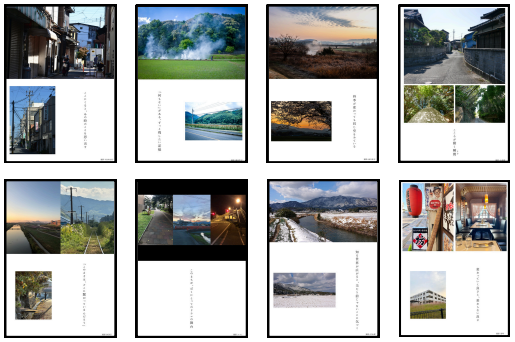
来場者数 ※展示会場をパーテーションで区切り、純粋な展示会場入場者をカウント

総来場者数 1,003名
大人689名、こども314名

企画協力

- 近畿大学産業理工学部建築デザイン学科（小池ゼミ）
- 株式会社シー・エム・エス
- 立岩地区まちづくり協議会

後援 飯塚市



「TOIKAKE」パネル展示

写真部のメンバーそれぞれが、飯塚再発見をテーマに撮影した写真、２～３枚をセレクトし、提出。
それぞれの作品かにキャッチコピーを入れ、写真と共にレイアウトし、１枚の作品に仕上げています。
それぞれの作品と、キャッチコピーから受け取れる「問いかけ」を、来場者の感性に落とし込んで、感じ取っていただく作品展示です。

インスタレーション展示

近畿大学建築・デザイン学科の学生メンバーがレイアウトした、飯塚を囲む山々をイメージしたモニュメントにそれぞれのエリアのさまざな顔を貼り付け、ランダムに展示。会期が進むにつれ、少しずつ増えていく写真。
成長していく、飯塚をイメージしたインスタレーション表現の展示となっています。

小学生の写真作品展示

写真を通じた授業を受けた、立岩小学校、小中一貫校頴田校の小学生による「紹介したい、わたしのまち」をテーマに宿題で撮影した写真を展示。
鳥居をイメージした展示構造物にそれぞれのクラスの写真を連結させた、一つの作品群として表現しています。
子供達の目線から見た、感性豊かな写真の切り取り方や視点の捉え方が感じられる展示です。

02 ｜ 写真を通じた教育プロジェクト

実施日 2024年10月28日(月)～31日(木)

場　所 飯塚市立 立岩小学校 、飯塚市立 小中一貫校頴田校

特別講師 ※特別講師2名に、写真部部長 橋田を加え3名で授業を展開

写真家 テラウチマサト氏、写真家 西澤廣人氏

対象者

飯塚市立 立岩小学校　5年生 （4クラス）
飯塚市立 小中一貫校頴田校　4年生（1クラス）

企画協力

- 近畿大学産業理工学部建築デザイン学科（小池ゼミ）
- 株式会社シー・エム・エス
- 立岩地区まちづくり協議会

機材協力 GOOPASS株式会社

02 ｜ 写真を通じた教育プロジェクト ／授業内容

立岩小学校5年生（約130名）、小中一貫校頴田校4年生（36名）を対象に授業を実施。
授業は4つテーマで、それぞれ2テーマずつ2日に分けて授業を行いました。
講師には、世界的写真家のテラウチマサト氏を含む、3名の写真家が授業を担当。
児童たちにとって、なかなか体験することができない経験になりました。

1時間目
「先生を撮ってください」

まずは、簡単な写真を撮る上での心得を学び、最初に一言、「担任の先生を撮ってください」からスタート。その後撮られた写真を皆でみていく。
撮られた写真は正面から、横から、後ろから、斜めから、さまざまなポーズと、仕上がる写真はすべて違う。「先生を撮る」 たったその一言だけで、皆の受け取り方も違うことを理解し、さまざまな感性や解釈を知る。
普段の授業では、基本的に皆が同じ答えを出すことに対し、こと芸術やコミュニケーションには多様性があることを理解する。
同時に、人に伝えることの難しさ、自分が伝えたつもりでも伝わっていないことがあるということも学ぶ。

2時間目
「これはなんだ？ここはどこだ？」

普段使っている教室や各実施小学校の校区（通学路など）で撮影した写真で、「なんだこれは？」と思う写真をクイズ形式で出題。
いつも使っている、知っているはずの教室であっても、角度を変えたり、ある部分だけをアップで見ると全く別の物に見えてくる。
注意深く観察することで、今までと違った、ものの見え方がわかってくる。
なんだろう？という疑問から探究心が生まれる。知ろうとしないと見えないものがあるということに気づき、何事も知った気にならないという考え方を身につける。

02 ｜ 写真を通じた教育プロジェクト ／授業内容

写真部メンバーも授業のサポートに入り、カメラの使い方や撮り方に迷っている子のフォロー、データの受け渡し、記録撮影など、各担当で連携し授業の成功に貢献。立岩小学校では最終日、受講した生徒130名による歌のサプライズもあり、感動のフィナーレを迎えました。

3時間目
「宿題：紹介したい、わたしのまち」

自分の住んでいる地域で、ひょっとしたら自分しか知らないかもしれない場所、また、誰かに自慢したい場所やモノを宿題として撮影し、発表した。
子どもたちが撮影した写真を1枚1枚、写真家テラウチ氏が講評を行った。
世界的写真家に評価されたという経験は自信や自己肯定感にもつながる。
友達の発表を聞くことで、自分たちの住んでいるまちの中に、自分が知らない素晴らしい場所や、ものがあることを知ることができた。
写真を撮る行為を通じて、外に出て自分の住むまちを意識して「観る」機会を作ることで、それが新しい発見と共に、思い入れや愛着に繋がっていく。

4時間目
「感情のかたち：友達を撮ろう」

撮られる側が「撮られたい自分」をリクエストし、コミュニケーションをとりながら、どう撮影したらそう見えるかを考え、話し合いながら撮影をする。
自分の要望を素直に相手に伝え、それを受けとった側は相手の気持ちに寄り添い、要望に答えようと考える。このプロセスを通じて、よく友達を観察したり、コミュニケーションを取る機会が生まれ、相手に自分の思いを伝えあうことで気持ちが伝わる大切さを学ぶ。
自分の思い (考え) を相手に伝える難しさを理解し、相手の気持ちになって考える心を育む。

02 ｜ 写真を通じた教育プロジェクト ／メディアでの掲載

（第3種郵便物認可）　新聞定価（税込み）月ぎめ4,900円・1部売り（税込み）朝刊160円夕刊50円　西日本新聞　2024年（令和6年）11月2日　土曜日　18

レンズ通し多様性学ぶ

飯塚市・立岩小で授業　5年生130人

プロ写真家ら解説「友人や地元の魅力 発見して」

飯塚市立岩の立岩小で10月28～30日、写真を通じて多様性を理解し、発見する力を身に付ける教育プログラムを行う授業があった。プロ写真家たちの解説に耳を傾けながら、5年生約130人は同じ風景や被写体でも撮影者によって異なったイメージの写真になることなどを学んだ。

写真を通じたまちづくりに取り組むカメラマン橋田隼平さん(39)＝同市＝が企画。師匠と仰ぐプロ写真家テラウチマサトさん(70)＝東京都＝ら計3人で講師を務めた。

プログラムは4コマあり、自分たちが撮影した担任教諭やクラスメート、風景の写真を題材に、意見を出し合ったりクイズに答えたりするといった方法でクラスごとに行われた。

担任教諭をそれぞれが写した写真を見比べた児童は、教諭が違って見えることにびっくり。クラスメート同士で撮影し合う際には「真面目な人に見えるように写して」などと撮られる児童が注文を出し、どんなポーズをしてもらうかに頭を悩ませた。写すことや写されることを通してクラスメートが一人一人違うことを知り、多様性を学んだという。

登下校中に撮影した通学路の風景の写真を持ち寄った児童に、テラウチさんは「光の当たり方や、空と街並みが写る割合が違えば印象も変わるんだよ」と説明した。

梶原爽平さん(11)は「角度を変えて撮ることで印象が変わることを知った。友だちの良いところや写してほしいところを考えながら撮るのが難しかった」。橋田さんは「写真を通じて友人や地元の新たな一面を発見し、子どもたちが飯塚の魅力に気づき郷土愛を育む機会にもなってほしい」と話した。

授業は小中一貫校穎田校（同市鹿毛馬）でも開かれた。両校児童が撮影した市内の風景写真は12月26～30日、ゆめタウン飯塚（同市菰田西）で展示する予定。（泉岡さくら）

サッカー好きを表現するクラスメート（右）を工夫しながら撮影する児童

平成筑豊鉄道に1億5000万円

沿線市町村が追加助成方針

田川市発表

田川市は1日、経営難が続く第三セクターの平成筑豊鉄道（福智町）に、株主である沿線9市町村が本年度中に1億5千万円を追加助成する方針であると発表した。同社が金融機関から5千万円を借り入れる予定で、鉄道維持に必要な2億円の資金不足を補う。9市町村は各負担分を盛り込んだ補正予算案を編成し、12月議会に提案する。

市によると、同社から自治体側に追加助成の打診があったのは5月。同社は不足額を2億5千万円と見積もっていたが、精査した結果2億円となった。

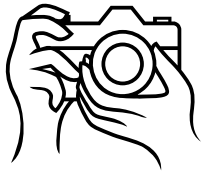
9市町村は2011年度

筑豊
筑豊総局
0948(22)3500
FAX 0948(22)3503
〒820-0004
飯塚市新立岩12-9
直方支局
0949(26)1361
田川支局
0947(42)2205

取材を受ける様子を写真部メンバーが撮影。

2025年度以降の計画は別紙参照

2025年度より計画中の新プロジェクト



歴史/文化/暮らし×謎解き×写真

with Photo Life
飯塚

アジェンダ

01 …… プロジェクトのコンセプト

02 …… with Photo Life 3つの特徴

03 …… フォトマップ＆特設サイト

04 …… フォトウォーク

05 …… 重ね押しスタンプラリー

06 …… 目指す全体の構造

07 …… まとめ

01 | プロジェクトのコンセプト

写真のある日常から始まる小さな冒険。
健幸的に、ワクワクしながら、まちなかで楽しむフォトライフ。

市内の歴史や伝統、フォトジェニックな場所が記載されたフォトマップを歩き、写真を楽しみながらまちを知る。
場所によっては謎解きもあり、自ら謎を紐解きながら、まちの歴史や文化、営み、特徴を理解する。
このプロセスを通じて、能動的にまちを知ることに繋がり、よりまちに関心を持つキッカケになる。
歩いてみることで、今まで知らなかった、まち並みや、新しい気づきが見えてくる。
自らが探偵になるという設定でワクワク感が高まり、歩く目的ができることで、健幸的な身体作りにも繋がる。

結果、まちへの愛着が深まり、
「ずっとこのまちで暮らしていきたいと考える気持ち」が大きくなる。

02 | with Photo Life 3つの特徴

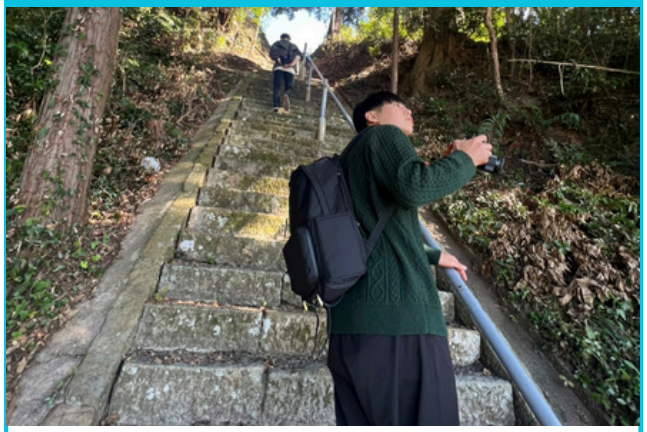
まちの探求

謎解き

フォトマップに記載された、謎解きポイントをクリアしながら、自らまちを探求する。

自然とそのまちに詳しくなる

健幸づくり

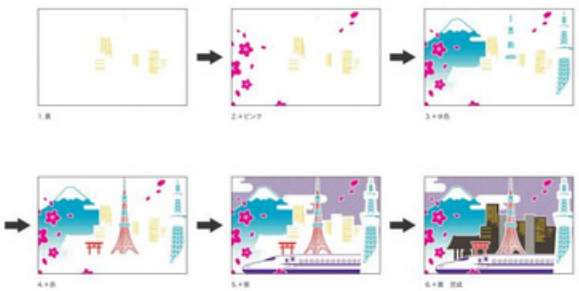


フォトウォーク

歴史的な裏路地や、フォトジェニックなスポットを写真を撮りながら歩いてめぐる。

楽しみながら健幸的な身体づくりに繋がる

まちを巡るキッカケづくり



重ね押しスタンプラリー

各所に設置されたスタンプを重ね押ししていくと飯塚のとある風景のポストカードが完成する。

まちに出掛ける楽しみが生まれる

03 ｜ フォトマップ＆特設サイト

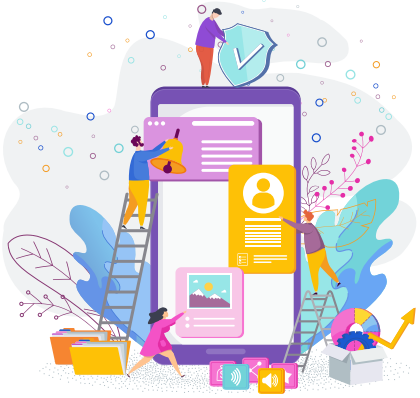
フォトマップ

フォトマップには各エリアごとに謎解きが設けられており、エリアを回りながらその謎を紐解けるようになっている。
飯塚にゆかりの深い場所やフォトジェニックなスポットを訪れ、写真を撮りながら自らまちを知っていく。
一方的に教えられるまちの歴史ではなく、自分の足で歩き、目で見て、「感じ取る歴史」と「今」を写真に収めながら、まちを探索する。

フォトマップ自体が謎解きの道具になっていたりもするギミックなど、お楽しみ要素も検討中。

※謎解きの問題は外注するのではなく、市民が自ら考えることで、その過程を通じて、自然とまちに詳しくなるというメリットもある。

特設サイト



特設WEBサイトを制作し、市外の人に興味を持ってもらうのはもちろん、若い層がスマホを持って、まちを散策するのにも利用してもらえるような、謎解きに進む前の導入として活用できることを期待。

04 ｜ フォトウォーク

フォトマップにそって、写真を撮り、謎解きしながらまちを歩く。
（写真を撮っておくことで、後々の謎解きに生かされる要素なども入れる）

フォトウォークの過程で撮った写真にハッシュタグをつけてインスタグラムにアップしてもらい、アップされた写真は写真部主催の写真展に展示されることとする。
それにより、写真を撮る目的が増え、モチベーションがさらに上がる。

フォトマップを使ったイベントはライセンスフリーで誰でも企画可能とすることで、より多くの人がまちに出掛け、まちを知るキッカケを促す。

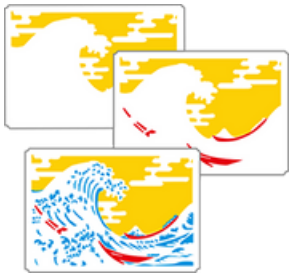
楽しみながら歩くキッカケづくりにもなり、「健幸的な身体づくり」に繋がる。

なお、エリアによって、スタンプラリーの絵柄を変えたり、フォトマップを定期的に更新していくことで、一過性で終わらず、継続的に実施していくことができる。

05 ｜ 重ね押しスタンプラリー

浮世絵をイメージし、重ね押ししていくことで一つの絵になる。
スタンプラリーの台紙はポストカード（サイズ）。
スタンプ台自体は複雑な構造ではないので、自作する。自作することで、
スタンプ台自体にも愛着を持つことができる。
地域の彫刻サークルやそういった伝手にも絵柄の彫刻制作の協力を仰ぎ、
完成させる。絵柄は飯塚の風景（写真部で撮影会を行い、選定）

（※効果の測定のため、台紙のはけ具合、全てのスタンプを押し終えた人がわかる仕組みも考える）



※スタンプ台のイメージ

各エリアの交流センターに、スタンプ台を設置することで、まず交流センターに車（や自転車など）で訪れ、
スタンプを押し、かつそこを起点にフォトウォークを開始するまでのフローが整う。
まちを巡ることで、まちにある店舗にも人の流れが生まれるので、ゆくゆくは市内の有名店舗にもスタンプ台
が置かれるようなプロジェクトになっていくことが望ましい。

06 ｜ 目指す全体の構造

写真部×近大生チーム

フォトウォークの検証、フォトスポットの捜索（写真部）。スタンプラリーのメインビジュアルの選定など行う。撮影エリアのルートや謎解きの検証などをテストする。

飯塚市観光協会
（観光マイスター協会）

フォトマップに記載する飯塚市ゆかりのスポットや謎解きに最適な問題など相談。実はあまり知られていない歴史的な場所やマニアックな飯塚独自の文化的スポットを選定。

市内の交流センター

4～5箇所の交流センターにスタンプラリーのスタンプ及び、スタンプ台紙、フォトマップを設置。フォトウォーク時に駐車場を利用させてもらうなど協力を仰ぐ。

そのほか協力をお願いしたい

飯塚市スポーツ協会

シティプロモーション

まちのお店や企業

07 ｜ まとめ

この取り組みは市内に住む大人から子どもまで、幅広い層をターゲットにしています。
謎解き＆フォトウォークエリアは各交流センターを起点とするため、すべてのスタンプを押すとなると、それなりに広い規模での移動が必要になります。
1日でスタンプラリーを周りきるというようなイメージではなく、
まちに住む住民だからこそ、今週（今月）はこのエリア、来週（来月）はこのエリアというように、時間をかけて楽しんでいただくのが理想的です。
観光客であれば、一過性の観光というより、何度も足を運ぶ目的になるとよいと考えています。

「with フォトライフ」～フォトライフとともに～
住民が日常の中でじっくり楽しむ目的として、その暮らしのそばに写真を。

この取り組みを通じてまちを知り、健幸になり、休日まちに出かけ、まちを知り、まちをもっと好きになる、そのキッカケになることを願っています。

市民遺産研究会

会長　白神 精一

年の瀬が迫った12月1日、私たち市民遺産研究会は大分八幡宮に集合した。この日大分八幡宮では、県指定無形民俗文化財の「大分の獅子舞」が初奉納から300周年を迎えたことを記念して「獅子舞フェスティバル」が開催された。

大分八幡宮は、奈良時代の726年(神亀3)に創建されたといわれ、神功皇后と所縁のある格式高い神社として知られている。

1720年(享保5)、筑前国穂波郡大分村の庄屋・伊佐善左衛門直信が戦国時代の争乱で絶えていた祭礼を再興する目的で、村人15人を京都・石清水八幡宮に2か月間上洛させて獅子舞を習得させ、1724年(享保9)に大分八幡宮の祭礼・放生会で奉納したのが「大分の獅子舞」の始まりで、今年で300周年を迎えた。

五穀豊穣や家内安全、子孫繁栄などを祈願して奉納された大分の獅子舞は、筑豊地方をもとより、福岡市東区、朝倉市、みやこ町など、県下の獅子舞に大きな影響を与えていることから、福岡県指定無形民俗文化財となっている。

約2千人が来場した境内には、筑豊地区11の獅子舞が一同に会した。

開会式後のオープニングセレモニーは高田小学校5・6年生による勇壮な太鼓演奏。お目当ての獅子舞披露は「本家家元」の大分の獅子舞が1番手を飾り、続いて忠隈、上西郷、弁分、楽市と、大分を源流とする獅子舞団体が出演した。

午後の部では、別の系統(綱分系)の綱分八幡宮の獅子舞や、デジタル音楽と融合した嘉麻市の「屏の舞」も登場。特別出演の三毛門神楽(豊前市)は国重要無形民俗文化財で、重厚な神楽は私たちを幽玄の世界へ誘った。その後も平山、熊ヶ畑、安恒と獅子舞は続き、椿獅子舞保存会の勇壮な舞いが最後を締めくくった。

笛や太鼓の祭囃子に合わせ仲睦まじく舞う雌雄の獅子、口を開き音をたてる重厚な獅子頭、乱舞する獅子廻しに魅了された一日だった。

獅子舞はインド・チベット地方を起源とし、飛鳥時代に朝鮮半島の百済を経て伝来したと言われる。以来、先人たちから脈々と受け継がれた獅子舞は、「由緒ある神事」・「庶民の芸能」として地域に根付いた。高齢化や後継者不足などの試練を乗り越えて、これからも継承していきたい「生きている文化遺産」である。